

そして馬になる

初めまして。札幌市保健所感染症総合対策課の古澤弥と申します。私は、もともと小児科の臨床医でしたが、3年前に札幌市の行政医として入職いたしました。最初の2年間は区の保健センターで主に乳幼児健診に従事し、平成30年度より保健所の感染症部門で山口亮先生(1月号で投稿)の下、勉強中です。臨床と行政のギャップが日々新鮮です。

はじめに

当コナーは、「期待の若手シリーズ」ですが、ベテランの先生方も多く寄稿していらっしやいます。その中で、私は年齢も経験も本当の若手であり、この場に投稿させていただくのは恐縮なのですが、「自由に語ってもらおう」企画ということですので、失礼を承知で、正直な自己紹介をさせていただきますと思います。

行政医になった経緯

私は、大学を卒業後、シテイボーイに憧れて、横浜で初期研修を行いました。公衆衛生については、まだまだ分からないことだらけですが、臨床から行政に入って、そのギャップとして感じたことをこの定義を参考に振り返りたいと思います。

(1) 共同社会の組織的な努力

行政に入って感じることは、対外的な働き掛けが非常に多いことです。議員、医師会、各医療機関、報道などの連携を図りながら、社会全体の健康を増進していく。これは、臨床医の時には経験できなかったことです。

臨床医は、個人として患者に対して責任を伴います。誤った判断が、患者の生命に関わることもあり、スピード感が求められます。

一方、行政医は、組織として市民に対して責任を伴います。行政は臨床ほどその判断にスピード感はありませんが、その分、社会的な大きな問題になりかねないため慎重な判断が求められます。そして、他機関との連携が非常に重要になってきます。

(2) 疾病を予防し、健康寿命を延長

いました。その後、満を持して、東京進出をもうろみましたが、妻の意向で北海道に戻ることとなりました。母校の小児科に入局し、道内の地方病院に勤務しました。そのまま、臨床を続ける予定でしたが、重症心身障害児の娘が生まれ、臨床を続けることが難しくなり、家族と相談して、行政医に転職いたしました。

正直なところ、学生時代から、公衆衛生にはあまり興味がありませんでした。当時の大学の先生方には大変失礼ですが、講義もよく覚えておりません。ですので、まさか私がこの世界に入ることになった

私が、小児科医を志したのは、子供が好きであるということが、いちばんの理由です。もう一方で、高齢者への医療に興味があったことも理由です。当時の私には、「長生きをしたい」という気持ちで理解できませんでした。

しかし、重い障害のあるまな娘が生まれ、その考えは変わりました。今の私の夢は、年老いても娘を抱っこしてあげること、娘の還暦をお祝いすること(その時、私は90歳)です。

「健康で長生きしたい」と自らが思っていること、これは公衆衛生の仕事をする上で非常に重要だと思っています。

(3) 身体的・精神的健康と能率の増進

内閣府によるとワーク・ライフ・バランスは「健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会」を目指すものとされています。これは「身体的・精神的健康と能率の増進」につながります。

臨床医時代は「ワーク・ワーク・アンバランス」でしたので、恥ずかしながら、その言葉を知ったのは行政に入る時でした。初めて聞

るとは思ってもいませんでした。

転職に際して、小児科の上司や先輩、大学の同期にも行政に移ることを反対されました。私自身にとっても臨床を離れることは大きな決断でした。結婚する時よりも大きな決断だった気がしますが(決して軽い考えで結婚したわけではないことを申し添えます)。

高い志で行政に入られた方々にはお恥ずかしいですが、これが正直なところでした。

二人のお師匠様

臨床から何も分からずに行政に入って、何にやりがいを見いだしていけばよいのか分かりませんでした。私にとって、幸いだったのは、行政に入って、二人の先生の下で、学ぶことができたことです。お一人は、配属された保健センターの上司であった鈴木直己先生(現旭川市保健所長)です。同じ小

いた時には、「それは、今年の流行語か何かですか?」という感じで衝撃を受けました。

医療現場においては、患者を救うことが最優先事項であり、医師本人の健康や家族は置き去りにされがちです。

私も娘が生まれた後、1年ほど臨床医を続けて忙しく働いていましたが、ある時、妻に「お医者さんはたくさんいるけど、お父さんは一人しかないんだよ」と言われてしまいました。

公衆衛生に従事する行政医として、自分の体、家族、職場の同僚も含めて、ワーク・ライフ・バランスを意識して仕事をしていきたいと思っています。

今後について

上司のご厚意で、行政に入ってから、報道対応、議会対応、事故調査、被災地支援など、今まで経験したことのないようなことをたくさん経験させていただいています。日々、行政医の仕事の幅広さ、奥深さを肌で感じています。

行政の難しいところは、実際に人と対面しない点だと思います。



札幌市保健所
感染症総合対策課
古澤 弥

平成23年北海道大学卒業。25年同大小児科に入局。その後、道内の地方病院で勤務。28年札幌市入職。30年より現職。小児科専門医。日本医師会認定産業医。

児科医であり、非常に理解のある方で、公私にわたりサポートしてくださいました。また、虐待対応など、保健センターにおける医師職としての在るべき姿を見せていただきました。

お二人目は、本誌1月号の投稿で登場した山口亮先生です。最初の1年間は週1回のマンツーマンで、2年目以降は隔週で、若手医師3名に対し公衆衛生の講義をしていただいております。長年の行政医師としてのご経験や疫学の基礎などをお得意のギャグ(世代間ギャップで、反応できない場合もあります)を織り交ぜながら、教えていただいております。

行政に入って思うこと

ウィンスロウ(C.E.A. Winslow; WHO)の定義(1949)では、「公衆衛生は、共同社会の組織的な努力を通じて、疾病を予防し、

臨床医であれば、目の前に患者がいて、自分が行った医療行為が、そのまま結果として返ってきます。しかし、行政医の場合には、相手は市民全体で、目の前には現れてくれません。そして、その結果については、返ってくるのに時間差が生じたり、分かりづらいこともあるような印象を受けます。

そのため、常に市民の視点に立って考え、行動することを心掛けていきたいと思っています。1月号の山口亮先生の投稿では、『鍛えて最強馬をつくる』にかけて、「鍛えて最強行政医をつくる」という題名で、大きな期待を寄せておられます。競走馬どころか、まだまだポニーの私ですが、まずはスタートラインに立てるように頑張りたいです。サラブレッドというよりも、ばんえい競馬のような、一步一步を力強くしっかり踏みしめていくような馬(行政医)になれたらと思っています。

今後、さまざまな場面で皆さまのお世話になることがあるのかと思われませんが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。